

## 『八重葎』注釈（上）

田村俊介

擬古物語（別称：中世王朝物語）『八重葎』は、二〇〇七年後半に出版された、辛島正雄氏妹尾好信氏共編『中世王朝物語の新研究』（新典社）でも、この作品の訳が俟たれる旨、記述されている。『八重葎』は「総合的にはやはり中世王朝物語の中で秀作の部類に入る作品である」と言うことができる」（前記『中世王朝物語の新研究』）からである。

しかしながら、二〇〇八年現在、全文訳は公刊されていない、注釈書も極めて少ない。

こうした中で、少しでも研究の進展に役立てていただければという思いで、筆者の注釈的研究の成果を公表する次第である。

今回掲載するのは、全体をおよそ二十八の段落に分けた、その初めの十二段落、今井源衛氏『やへむぐら』（古典文庫、一九六一年）で言えば、55頁から165頁に互って本文が掲載されている、その55頁から93頁二行目までである。今井氏の古典文庫本には、注や引き歌、部分訳が掲載されているが、今回の範囲で言えば特に、注四、注五、注三二、注五四、注一〇一、注一〇五、注一四四、注一五三を訂正したり補足したりする。翻刻の段階の今井氏の誤りと思しき箇所は、今回の範囲では極めて少ないが、75頁二行目（ここに誤りがあるということ）は、大学院生の指摘で気付いた）、79頁一行目、91頁三行目、91頁八行目、92頁九行目は、底本の複製に基づき、訂正するつもりである。又、92頁三行目、21頁等に就いても、それぞれ一箇所ずつ訂正する。底本の複製一部の購入、又、掲載を許可して下さった、静嘉堂文庫御当局には、心よりお礼申し上げます。

\*

# 凡例

◎本稿は、静嘉堂文庫本『八重葎』（やへむぐら）の釈文を掲載し、これに必要な注釈を加えたものである。

◎底本の様態、『八重葎』の他の写本との本文比較は、他書に譲る。既に出版された学術書にも記載されているところであり、又、今後出版される学術書にも詳述される予定であるとのことだからである。このため、次のような処置を取った。

ア. 底本に誤写があると思しき箇所は、語釈に記した。

イ. 底本には、引歌引詩をあらわす山型の印があるが、これは、本拙稿では、省略に従う。

ウ. 底本に見え消チ・補入がある箇所については、見え消チ後、補入後の本文に基づき釈文を作った。例えば、一〇丁表五行目に「御有さまか<sup>は</sup>」とあるが、これは、「御有様かは」と釈文を作り、消された「な」の字は記さなかった。静嘉堂文庫本の様態の厳密な再現は、古典文庫本を含む他書に譲るつもりだからである。

エ. 底本の仮名遣いは歴史的仮名遣いに直し、適宜、ひらがなを漢字に、漢字をひらがなに直した。なお、このような処置に準じて、例えば、「かう」を「こう」に直した箇所もある、具体的には〔九〕に、「内裏<sup>うち</sup>には弘徽殿<sup>こうきでん</sup>さぶらひ給ふに」と記した箇所は、底本では「うちに八かうきてん……」（一七丁裏八行目）である。

オ. 会話文には、「」を付けた。その会話文の中の会話文には、『』を付けることがある。更にその『』で包まれた会話文の中の会話文（今回の範囲では無し）には、△▽を付ける予定である。そして、話者を（ ）で括って示すことがある。力. 心内文に就いても、前項に準ずる処置を施すことがある。

◎諸作品の引用には、主として、次の叢書を用いた。

- ①小学館発行日本古典文学全集【略称 全集】
- ②小学館発行新編日本古典文学全集【略称 新全集】
- ③岩波書店発行新日本古典文学大系【略称 新大系】
- ④新潮社発行新潮日本古典集成【略称 集成】

これら①～④を用いる場合、略称で示し、これら以外の叢書や研究書を用いる際には、正式の書名、著者（编者）、出版社、出版年等も書き添えることにする。

◎和歌集の引用には、次のような基本方針を採る。

イ. 八代集のうち、新全集が収録している作品（『古今和歌集』、『新古今和歌集』）については、新全集を用いた。

ロ. 八代集のうち、イで記した二つの歌集を除く六つの歌集（『後撰和歌集』、『拾遺和歌集』、『後拾遺和歌集』、『金葉和歌集』、『詞花和歌集』、『千載和歌集』）については、新大系を用いた。

ハ. それ以外の歌集については、角川書店発行『新編国歌大観』（一九八三年）を用い、その叢書名も書き添えた。

◎散文作品の引用には、次のような基本方針を採る。

イ. 『徒然草』の引用は③の新大系に拠った。正徹本を底本にしているからである。

ロ. 『徒然草』を除くほとんどの作品については、②の新全集を用いた。同叢書は、キッココーカッコ（一）で段落番号を示しているのので、それによって、引用箇所直接当たる便を図った。『源氏物語』からの引用の場合、巻名とそのキッココーカッコ内の段落番号のみを示し、『源氏物語』という作品名は省略した。

ハ. 新全集以外の叢書（研究書）から引用する場合、その叢書名（研究書名）を正式名称、若しくは、略称で示した。

研究書を引用する際には、著者（编者）、出版社、出版年等を書き添えることにした。但し、次の三著については、二重三角カッコで包んで、著者の苗字のみ、若しくは、著者の苗字と論文名や書名のみ記させていた。予定である。

○今井源衛氏『やへむぐら』（古典文庫、一九六一年）の解題や注及び本文表記に添えられた注記 ↓ 《今井氏》

○妹尾好信氏『『八重葎』引歌表現覚書』（『国語の研究』第十七号、平成四年一〇月） ↓ 《妹尾氏『『八重葎』引歌表現覚書』

○久保田淳氏・馬場あき子氏編『歌ことば歌枕大辞典』（角川書店、一九九九年） ↓ 《久保田氏・馬場氏『歌ことば歌枕大辞典』

◎和歌集や散文作品を引用する場合、右の引用テキストに直接当たって引用した。従って、文章の表記や歌番号等に就いて今井氏の引用の仕方と違うこともある。しかし、古典文庫本と同じ作品の同じ箇所からの引用がある場合には、《今井氏》などと記すことにした。

◎本作品自身の他の段落に参考となる一節がある場合、キッコーカッコ（一）内の段落番号と共に引用することにした。但し、今回の範囲は、執筆者の段落分けで言えば、「一」から「二二」までなので、「二三」以降の範囲から引用する場合、不本意ながら、便宜的処置として、前記古典文庫本の頁数も記すことにする。

## 〔一 中納言の卓越〕

人の語りしは、昔々、中納言の君と聞こえて容貌、心ばへをかしかりしは、その頃の中宮の御兄人、故左大臣殿の御継ぎの一つ子になんおはしける。母上は、故上野の宮の上の御妹なり。この宮のただ一人持給へりける姫君なん、内裏の御はらからの、中務の宮の上にて、御あはひもいとうるはしくおはしましけり。大臣隠れさせ給へど、中納言殿、大人び給ふめれば、心もとなきこともあるまじげなるに、まして公さまの、道々しき才などは故殿にもまさせ給ひて、又はかなき琴笛の音も、その心を整へ知りすて飽かぬことなき人様にいまそがりける。二十三、四にもおはしけむ、中務の宮も、同じ御齡ならむかし。さる御仲らひと言ふうちにも、取り分き思し交はして、はかなきことの筋をも隠さむものとはかたみに思したらざるべし。

### 語釈

○その頃の…… 「勾兵部卿」「橋姫」「宿木」「手習」は、「その頃」という副詞から始まる。これら四つは、主要登場人物がその前までの巻と一新する巻である。ここでは、名詞として使われているが、そのような意味で「その頃」は、「昔」や「今は昔」と同様、作品全体の冒頭にふさわしい言葉である。

○大人び給ふ 現代語「大人びる」と同じようなニュアンスに取れる場合もあるが、単に「大人に成る」意で用いるのが基本であるようである。

○故殿にもまさせ給ひて 今井氏は、注四後半で、「まさせ給ひて」は「まさらせ給ひて」の誤脱か」と推定している。もし、例えば「二三」に「……この御覽ぜらるるにまさることはさぶらふまじくや」とめで給へば、……」とあればその推定も必要になつてくるかもしれない。しかし、実際は「……この御覽ぜらるるにますことはさぶらふまじくや」とめで給へば、……」とあるので、「二」のこの箇所に関しても、

「ます」という動詞（の未然形）が使われていたと考えてよいのではないか。

○琴笛の音も、その心を整へ知りすべて飽かぬことなき人様にいまそかりける 成人前の光源氏も「わざとの御学問はさるものにて、琴笛の音にも雲居をひびかし、すべて言ひつづけば、ことごとしうたてぞなりぬべき人の御さまなりける」（桐壺）（一一）と紹介されていた。

○整へ知り 琴や笛の演奏法をよく知っている、という意味の複合動詞であるが、第一動詞「整（ふ）」は管弦楽器にちなんだ、一種の縁語。

○いまそかりける 「いまそかり」という動詞については、竹河卷末の玉鬘の詞の中に「見苦しの君たちの、世の中を心のままにおごりて、官位をば何とも思はず過ぐしますがらふや」という一文がある。これについて、『河海抄』は、「つかさくらぬをもなにもおもへらすすくしますからふや」と掲出し、「古本に皆かくのことしたゝいますやといふ心也むかしのうはさ詞なりける歟」と注している（引用は、角川書店発行『紫明抄 河海抄』）。「いますがらふ」と同義と見られる「いますかり」に関して、意味はただの「います」ということであるが、口頭語（「うはさ詞」）として使われる、という注であろう。他に、梅枝巻には、「（源氏）兵部卿宮、左衛門督などにものせん。みづから一具は書くべし。気色ばみいますがりとも、え書きならべじや」と、我ぼめをしたまふ（二六）と、やはり会話文中の用例がある。このように、本来、会話文で使われる動詞だったと推測される。しかし、『源氏物語』の会話文専用語や野卑な語が、擬古物語では、用法がもつと一般的になる例はいくらでもある。

○さる御仲らひ 今井氏は「こういうめでたい方々の御交際の中でも」と解するが、「いとこの夫だから、仲良くするのが当然である。しかし、そのような一般的な親戚づきあいの度を越えて」という意味合いであろう。『源氏物語』では、夕霧と柏木の関係に類似する（二二）語釈「……隨身にてを侍らむ」と宣へば、「……否、ことごとしき隨身はむつかしからむ」とほほ笑み聞こえ給ふ。」の項参照）

彼ら二人もいとこ同士であるが、普通の親戚づきあいの程度を超えて、気心知れた間柄であった。「この君たち、御仲いとよし。さる仲らひといふ中にも、心かはしてねんごろなれば、はかなきことにても、もの思はしくうち紛るることあらんを、いとほしくおぼえたまふ。」（若菜下）（二二）。特に集成本『源氏物語』は、「さる仲らひ」について、「いとこ同士」という傍訳を施している。なお、『源氏物語』の「さる仲らひ」の用例はこれ以外にない。

## 〔二〕 中納言の生き様

（世の中の人）「あやしう、今まで独り住みにてものし給ふこそ、玉の瑕にはありけれ」と世の中にも言ひ、まして母上は、ただこのことのみ夜も昼も嘆かせ給ひて、御みづからも人伝てにても、絶えず聞こえ給へり。さるは、さりぬべき御あはひのなきにもあらず。（左大臣）「右の大臣の中の君にあはせ奉り給ひて、御後見をも物せさせ給ふべく」と、故殿の遺言に、あなたさまにも、内々にも宣はせ置きてしかば、やがてその程にも渡り給ふべくありしかど、いみじうもの憂がり給ひて、あながちにかけ離れ給ふもいとほしくて、かくはあるなりけり。人知れず思ふことありて、「それならでは」など思ふにもあらず。たゞいかなるにか、世をはかなきものに思ひ取り給ひて、（中納言）「いかでこの世を捨ててしがな。仏の御跡をまねぶまでこそおほけなからめ、せめて身一つの苦しみをだに逃れて、この五つの濁り深き世に又も生まれ来ざらん。かつは、生きる限りも、人の末の後るるは口惜しきわざなり。聖徳太子だに族絶えむことを願ひ給ふめるに、何の至りなき身の、世の常にて明かし暮らす、いと心憂きこと」と、年月にそへて思ひ成り給へど、（中納言）「ただ一所ものし給ふ上の、かく見るだに飽かず思したるを、誰に見譲り聞こえてか、さる道にも思ひ立たむ。「さらば、さは」とて行き離れなば、限りある御命も、必ず絶え給ひなまし。苦しみを逃れむとて、たちまち五つの逆さまの罪に落ちなば、仏も良きことと見給ふべき。いとど思ふ道には入り難からむ。ただおはします限りは、朝夕に見え奉りてむこそ目安からめ。これだにあるを女とて据ゑ置かば、心行かずながらも、年月に成らば、えさらぬ絆どもこころ出で来む。いつの時に、かしこき道にはたどり入らむ。あな、むつかしや」と思ふ心のみ、大人び給ふままに深く成り行き給へば、少しも人々しき辺りには、なげの情けさへ言ひ出づべきものとは思ひ給はず、宮仕へ人のはかなきなどには、思はずなる戯れ言も、ことに触れて言ひ交はし給へば、下の心のづしやかなるは知る人もなければ、世の中には、（世の中の人々）「あだにものし給ふ御色好みの、好きありきの難からむを思ひ憚りて、かうあぢきなき独り住みせさせ給ふ」など言ふめり。まことの聖さへ、女の筋には、道をも失ふなれば、まして、かくて一日もさぶらひ給はむ程には、（中納言）「あはれ」と見給ふ御忍び所も、をのづからはなどかなからむ。

## 語釈

○「あやしう、今まで独り住みにてものし給ふこそ、玉の瑕にはありけれ」 世間の人々の中納言評。『徒然草』第三段の「よろづにいみじくとも、色好まざらむ男は、いとさうぐしく、玉の盃の底なき心ちぞすべき。……」という感性和通底する。「底なき」というのは

欠陥であつて、「玉の盃の瑕」とも言い換えられるからである。

○独り住み 結婚していないと言うこと。葵上と結婚していた光源氏も、紫の上の保護者に当たる人物の前では、自分は「独り住み」同然である、と言っている。「あやしきことなれど、幼き御後見に思すべく聞こえたまひてんや。思ふ心ありて、行きかかつらふ方もはべりながら、世に心のしまぬにやあらん、独り住みにてのみなむ」（「若紫」二六）。「妻という物こそ、男の持つまじき物なれ。」「いつもひとり住みにて」など聞くこそ、心にくけれ」（新大系『徒然草』第百九十段）

○又も生まれ来ざらん 主語が二人称や三人称のときに用いられるあつたえの終助詞「なん」がこのように使われているのは不審。「今度生まれてくる自分」を三人称扱いしているのか。

○聖徳太子だに族絶えむことを願ひ給ふめるに 今井氏は、この部分を「聖徳太子ですら子孫の絶えることをお願いになつたという話だから」と訳し、「聖徳太子が子孫断絶を念じたという伝説は、徒然草六段に見える。（解題参照）この兼好の説は、聖徳太子伝暦に「太子命<sup>二</sup> 駕科長墓処<sup>一</sup> 覽<sup>二</sup> 造<sup>一</sup> 墓者<sup>一</sup> 直入<sup>二</sup> 墓内<sup>一</sup> 四望謂<sup>二</sup> 左右<sup>一</sup> 曰 此処必断、彼処必切、欲<sup>レ</sup> 令<sup>三</sup> 応絶<sup>二</sup> 子孫之後<sup>一</sup>」とあるのを誤解したもの」と注している。今井氏に引用された『聖徳太子伝暦』の言葉の、特に最後の一文は、「子供は無いほうが良い」という『徒然草』第六段の主張と完全に一致し、むしろ、「誤解した」という言葉のほうが理解に苦しむ。

尚、『聖徳太子伝暦』に拠れば、太子はこの後、「妃」に対して「……子孫續かざらん事は、豈大なる咎と云んや。孔子の遺教は後嗣無きをば不孝と為す。吾れは釋迦大聖の弟子<sup>た</sup>なり。豈孔子小賢の弟子<sup>た</sup>為らんや」と語っている（引用は、『国訳一切経』史伝部廿四（昭和三年）に拠る）。

ところで、島内裕子氏は、次のように述べている。「子といふものなくてありなん」（第六段）と兼好がその生き方の理想を書いた時、彼の脳裏には子を持たなかつた過去の人物たちが思い浮かび、その最後に聖徳太子の言葉が「ここを切れ。かしこを断て。子孫あらせじと思ふなり」と引用される。この引用は『聖徳太子伝暦』によるものが諸注によつて指摘されているが、注目すべきは、詳細な『伝暦』の記述の中から、特にこの言葉を兼好が引用していることである。確かに推古天皇二十六年冬十二月条にこの言葉は出てくるにしても、他の説話集や歌学書で書かれている聖徳太子に関する記述に、ここが引用されているものは、管見には入っていない」（「兼好」。『国文学

解釈と鑑賞』平成一一年五月号)。「八重葎」の作者が、現在散逸している文献や口頭での伝承、或いは、『聖徳太子伝暦』そのものを参照していた可能性は否定できぬものの、島内氏の研究を参照すると、『徒然草』引用の可能性はよりいっそう高くなるだろう。

○何の至りなき 原本は、「なにのいたはりなき」(二丁裏2行目)。今井氏は、「いたはりなき」は「いたりなき」の誤りだろう、としている。「木立、立石、前栽などのありさま、えもいはいぬ入江の水など、絵に描かば、心のいたり少なからん絵師は描き及ぶまじと見ゆ」(「明石」(五))のように、「至り」プラス打消し表現で、知的芸術的能力が劣っていると取れなくもない表現もある。

○五つの逆さまの罪 今井氏は、この前後を掲出し、現代語訳を施しているが、その中で、「五つの逆さまの罪」に関しては「君・父母・祖父母の何れかを殺した罪」という説明を(一)で包んで示している。しかし、日本の作品では、親を殺す罪、という用例が多いようである。『平家物語』で、平清盛に捨てられ侮辱まで加えられた祇王が自害を思い立った際、母が次のように言つて、思いとどまらせる、「わが身を投げば、妹も共に身を投げんといふ。二人の娘共におくれなん後、年老い衰へたる母、命生きてもなにかはせむなれば、我も共に、身を投げむと思ふなり。いまだ死期も来らぬ親に、身を投げさせん事、五逆罪にやあらんずらむ」(『平家物語』卷一「祇王」)。『平家物語』の「五逆罪」は、祇王が自害↓妹が自害↓母が、死期が来ないうちに自害、ということが予想されるので、母を殺す罪に当たるといふことであるが、『八重葎』の「五つの逆さまの罪」も、中納言が出家↓母が死期が来ないうちに死ぬ、という予想のもとに使われた言葉なので、酷似する。

○少しも人々しき辺り 今井氏は「すこしでもましな女」とする。具体的には「すこしでも身分が高い女」であろう。

### 〔三〕 中務宮、中納言ら、小倉山へ

長月二十日の程に、例の、中務の宮へおはしましければ、宮は壺前裁のもみぢのいとをかしき夕映えを見させ給ふ程なりけり。御消息聞こえ給へば、(中務宮)「こなたに」とて、御櫛引き繕ひて、御対面あり。かたみにをかしき御様、容貌を、御前の人もめでたくぞ見む。(中務宮)「秋も残りなうこそ成り行くめれ。小倉のもみぢいかに染めまさむ。この頃の程に思ひ立ち給ひね。頭中将、衛門督などもものせむとこそ言ひしか」と聞こえさせ給ふ。(中納言)「しか良く侍らむ。されど、小倉と言はむ山のもみぢは、はかばかしき色にも侍らざらむ。木立などなつかしう際異なるは、この御覽ぜらるるにますことはさぶらふまじくや」とめで給へば、(中務宮)「名にはさはらぬとこそ言ひ



ためれ」など宣ひて、さるべき御果物ども参りて、暮れぬれば帰り給ふとて、(中納言)「山へは明日ものせさせ給ひなむや。隨身にてを侍らむ」と宣へば、(中務宮)「つとめてより。誘ひ給へ。されど、否、ことごとしき隨身はむつかしからむ」とほほ笑み聞こえ給ふ。

君は帰り給ひて、御乳母の子の、あきのぶを召して、(中納言)「明日の御設け、をかしき様に、大井の辺りに待ち聞こえよ。主には、左衛門の督をこそたのみ聞こえめ」とて、あるべきことども宣ひ付けて、又の日のつとめて、宮へ参り給ふ。御車ども引き続けて、競ひおはす。御供の人も、若き限りは、おくれじと走りののしれど、さるはいとさわがしうとて、さるべきばかりこれかれとさぶらはせ給ふ。山におはしまし着きて見給へば、思しやりけるものしく、染めましけるもみぢの色々は、錦暗う見ゆ。下枝を折りて、中將の君、青海波を気色ばかり舞ひたる、いとおもしろし。(人々)「光源氏と聞こえし古のかざしも、かばかりにこそ」と皆、めでさせ給ふ。(頭中將)「いとまばゆき御よそへになん。その立ち並びたりけむ深山木の影だに侍らじを」と笑ひ給ふ。時雨さとして、露ほろほろと乱る程、いとど艶なり。督の君、

たづね来し君がためとや紅の

色を染めます時雨なるらむ

と聞こえ給へば、宮、

散らぬ間はここに千歳もをぐら山

見で過ぎがたき峰のもみぢ葉

と興ぜさせ給ふ。

(中納言)

名のみして山は小倉もなかりけり

なべて草木のもみぢしつれば

思ふ給へしには、こよなう変はりたる山の気色にこそ」と、聞こえ給ふ。頭の君、

古里はいづくなるらむ小倉山

もみぢの錦たち重ねけり

嵯峨野もはるばると見渡されて、霧の絶え間の女郎花などは絵に描きたらむにも劣るまじき花の盛りを秋風の吹くなど誰に語らむとをかし。

こなたかなた行きおはすに、大井の辺りより少し引きのけて、軟障<sup>せじやう</sup>引き廻し、萩の枝など引き結びて空薫もいと艶に薫りて、さすがに人しげくは見えず。(中納言)「いかなる者の秋を惜しむならむ。この御けはひも忍び給ふとも、さりとて聞きたらむに便なき様かな。上達部、上人などにはよもさぶらふまじ。ただ、あやしの痴<sup>ち</sup>れ者の、おのが徳あるままにかくは振舞ふに侍らむ。なかなかさやうの者は、憚り奉るべきことも思ひたらじ」など、中納言の君、聞こえ居給ふに、左衛門の君、桔梗<sup>ききやう</sup>の直衣、二藍の指貫、故づきをかしき様して、立ち出で給ひて、(左衛門の君)「渚清くは」と御気色賜り給ふ。さるは、様変へたる岸の辺りなりけり。宮をはじめ奉りて、ある限り笑ひ給ひて、(人々)「痴<sup>ち</sup>れ者は、これな」とて、袖を引きしろふ。中納言のつきづきしく言ひためること語らせ給へば、この君もいみじく笑ひ給ふ。(左衛門の督)「今日の御設けのため、中納言の君の宣ひつきたりしかば、いかでをかしからむことをと思ふ給へしかど、痴<sup>ち</sup>れ者の心の掟てはひがひがしくなん」とかしこまり聞こえ給ふ。はかなう世の常ならずし給ふれば、をかしがり給ひて、もみぢを焼<sup>た</sup>かせて大御酒参る。御供にさぶらふ博士<sup>はかせ</sup>召し出でて、苔の縁を払ふ人もありけり。琴弾き鳴らし、笛吹き合はせて、伊勢の海など歌ふ。鹿も劣らじと思ひ顔に、あはれに鳴き添へたる程、言はむ方なくおもしろし。御盃賜すとて、

ながむれば又惜しまれて秋霧<sup>あきぎり</sup>の

立ち別るべき心地こそせね

とめでさせ給ふ。御様めでたく、宮と聞こえさせむにこと合ひぬべし。(中納言)「(中務宮)『散らぬ間は』と聞こえさせ給ひし山のため、後めたう」と戯<sup>たはぶ</sup>れつつ、御土器<sup>かひらぎ</sup>取り給うて、中納言の君、

いづくとか分きて定めむ世の中の

色香にうつる人の心は

あまたたびめぐりて、有明の月高く上る程に、御車に奉る若き人々、帰さの道に行き隠るべき心設けにや、別れ別れに帰るも、ただなるよ

りはをかし。中納言殿ばかりぞ、宮までさぶらひ給ひて、まかで給ふ。

語釈

○名にはさはらぬ 「大井河に人／＼まかりて歌詠<sup>よ</sup>み侍けるに 能宣<sup>よしのぶ</sup> もみぢ葉を今日<sup>けふ</sup>は猶見む暮れぬとも小倉<sup>せうくら</sup>の山の名にはさはらじ」

『拾遺和歌集』・卷三(秋)・一九五 《今井氏》。小倉という名前だから暗いのだが、その暗さをものともしない程もみぢは明るく照り映えてゐるだろうと、いうこと。

○「……隨身にてを侍らむ」と宣へば、「……否、ことごとしき隨身はむつかしからむ」とほほ笑み聞こえ給ふ。 中納言が冗談混じりで「私

は、隨身としてお供しましょう」と言ったのに対し、中務宮は、これも冗談で「ことごとしき隨身はいないほうがいい」と返した。『源氏物語』の頭中将(この段落の中納言に当たる)と光源氏(この段落の中務宮に当たる)の、気楽に語り合える間柄を思わせる。「(頭中将)「……かやうの御歩きには、隨身<sup>すいじん</sup>からこそはかばかしきこともあるべけれ、後<sup>おく</sup>らさせたまはでこそあらめ。やつれたる御歩きは、軽々<sup>かるがる</sup>しきことも出で来なん」とおし返し諫<sup>いさ</sup>めたてまつる。(光源氏は)かうのみ見つけらるる(「こんな風に、頭中将にいつも見つけられ、後をつけられるのを」ねたしと思せど)」「(末摘花)」「(四)」。

又、『源氏物語』の柏木(この段落の中納言に当たる)と夕霧(この段落の中務宮に当たる)との対話にもより一層類似するものがある。

「雲居雁の実家へ行こうとする夕霧に対し、柏木が「御供にこそ」とのたまへば、「わづらはしき隨身<sup>すいじん</sup>はいな」とて帰しつ」「(藤裏葉)」「(三)」。○つとめてより。誘ひ給へ。 第二文で、と言つてもたった一文節であるが、早朝から(出掛けよう)と提案、第二文で、誘ひに来てくれ、と命令したのである。

一年後の「一二」段落で、この時のことを思い出して大原野への遊覧の計画が立てられるが、その際の「必ず。遅らかし給ふな」という中務宮の言葉も、第一文が必ず(出掛けよう)、第二文が置いてきばりを食わせないで下さい、のような意であり、この段落の二つの文と若干似てゐる。

○染めましけるもみぢの色々 「色々」とあるので、赤い葉もあれば黄色い葉もあろう。例えば、『源氏物語』の「もみぢのが」という巻名は「紅葉賀」という漢字を宛てるのが通例であるが、ここでは、「紅葉」とも「黄葉」ともせず、ひらがなで表記したい。

○錦暗う見ゆ 今井氏は「紅葉の錦が重なって黒く見えるほどであった。あるいは「くろう」は「暗う」で、錦が重なって暗くの意か」とする。

「あるいは」以下に賛成し、才段長音の開音同音の混同と考えたい。その「錦が暗く見えた」とは、人間が着ている錦は普段は明るい色だが、小倉山の赤い葉や黄色い葉が余りにも明るい色なので、暗い色に見えてしまう、と解釈する。

○中将の君、青海波を気色ばかり舞ひたる 原本は、確かに、「……中将の君……」と読める（四丁裏6行目）ので、頭中将のことと解釈すべきである。今井氏は、「中納言のことを誤ってかく記したか。」と注するが、ここでは、脇役が舞い、光源氏に擬せられたと考えることも十分に可能である。従って、少し後の、「いとまばゆき御よそへになん。その立ち並びたりけむ深山木の影だに侍らじを」も当然、頭中将の台詞である。

○その立ち並びたりけむ深山木の影だに侍らじを 官職は同じでも、『源氏物語』の、いわゆる頭中将にも及ばない。なお、『源氏物語』では、「立ち並ぶ」という複合動詞は、ライバルとして競い合う、というニュアンスで使われる場合が多い。

【用例その二】「（光源氏と）立ち並びては、なほ花のかたはらの深山木なり」（「紅葉賀」〔一〕）

【用例その二】「（桐壺帝譲位後）（藤壺と）立ち並ぶ人なう心やすげなり」（「葵」〔一〕）

【用例その三】「立ち並びておし立ち給ふことはえあらじ」（「若菜上」〔五〕）

○たづね来し君がためとや…… 訪ねて来た宮のためと思ったのだろうか、時雨がもみじ（この和歌では、「紅葉」）をより一層濃く美しい色に染めているようです。

○散らぬ間はここに千歳もをぐら山…… 今井氏は、小倉山に「送る」の未然形「送ら」が掛けられていると見ているようだが、「居る」の語幹が掛けられている、と見ることも可能か。

〔三五〕の、中納言の詠歌「かくてのみいつまでか世にありま山 猪名の笹原否と思へど」の「ありま山」に「（いつまでか世に）あり」（古典文庫本一四七頁）が掛けられているのが大いに参考になる。

全体の歌意は、「散らないあいだは、この小倉山に千年間でも居たいものだなあ。この山のもみじの葉は見ないで通り過ぎる気にはとてもなれないよ」。

○名のみして山は小倉も…… 「お暗」というのは名前だけで、実際は暗いどころか、とても明るいですね。草木がごとごとく紅葉（若しくは黄葉）していますから。

○古里はいつくなるらむ小倉山…… （嵯峨野は、）人が少ない荒れ果てた場所（『古里』だと思っていたのに、全くそんなことはありませんでした。錦を着た人がたくさんいるので。

○霧の絶え間の女郎花などは絵に描きたらむにも劣るまじき。花の盛りを秋風の吹くなど誰に語らむとをかし。をみなへし花のさかり

に秋風のふくゆうぐれを誰にかたらん」（『後撰和歌集』・卷六（秋中）・三四一）《妹尾氏『八重葎』引歌表現覚書》。掲載誌等は、凡例参照》。尚、本歌の第二句は「花のさかりに」吹く、であるのに対し、本作品では、「花の盛りを」吹く、である。これは必ずしも誤写や作者の記憶違いと考える必要もなく、本歌のほうが「花の盛りの時期に秋風が吹く」の意であるのに対し、本作品のほうは、「今を盛りに咲いている花に秋風が当たる（『秋風が吹く』の意に改変した、と解釈する余地がある。

○はかなう世の常ならずし給ふれば、をかしがり給ひて、 「はかなう世の常ならずし給ふ」は、わざと「はかな」くなるよう趣向を凝らした、ということであろう。「はかなし」が「をかし」に値する美意識であることを示すのが、〔七〕の「姫君」「木の丸殿に侍らばこそ」と言ふもはかなだちてをかし」という一節である。

○御供にさぶらふ博士召し出でて、昔の緑を払ふ人もありけり ここまで、『和漢朗詠集』などにも採られている、「林間に酒を煖めて紅葉を焼く 石上に詩を題して緑苔を掃ふ」（上・秋興・二二二）などに基づいた文飾である《今井氏》。この出典を念頭に入れて解釈すると、「博士に相談しながら漢詩を作る人も居た」の意である。

○伊勢の海 催馬楽の曲名。《今井氏》

○ながむれば又惜しまれて…… 「立ち分かれ」の「立ち」の「霧が」立ち」が掛けられている。

全体の歌意は、「風景を眺めると、（あまりに美しいので）又、執着心が起こってしまう。秋風は「立つ」が、私は「立」って、小倉山と分かれることができるような気にならないなあ」。

○「〔中務宮〕『散らぬ間は』と聞こえさせ給ひし山のため、後めたう」と戯れつつ、 「ながむれば又惜しまれて……」という中務宮を受

けて、中納言が冗談を言った、ということ。その冗談の内容について、今井氏は、注五四で、「前出中務宮の「ちらぬ間はこゝにちとせもをぐら山」の歌をさしている。「ながむれば」の歌は小倉山にとつて気がかりだ、の意」と注している。なるほど、『源氏物語』などでは、「後ろめた（し）」は、ほとんど全て「気がかりだ」のような意味であり、この作品の中にもそのような意味である用例がないではない。しかし、中世では、「のために」で受けられている人物、若しくは、「のため」で受けられている人物に対して、申し訳ない、気が咎める、という用例も出現する。例えば、『増鏡』の北条義時の詞の中の、「……賤しけれども義時、君の御為に後ろめたき心やある。……」（『新島守』。井上宗雄氏講談社学術文庫本『増鏡（上）』（一九七九年）一二五頁）などであり、又、この作品で言えば、「二三」の叔母君の詞の中の、「……亡き人のため後ろめたく、さりとて若きにもあらず。……」（『古典文庫本一〇〇頁』）、「九」の「亡き人のため後ろめたき心なり」などである。

中納言の論理では、先程、中務宮は「もみじが散らぬあいだは、千年でもここ小倉山のふもとにいる」と詠んだのだから（今井氏の注三七では、「……ここで千年でも送りたい」と解釈されているが、「千年居る」と「千年送る」の違いは以下の論旨を左右しないだろう）、もし今晩中にここを離れて自宅に戻ってしまったら、千年どころか二日と滞在しなかったことになるので、小倉山を裏切ることになるのである。「君の御為に後ろめたき心」が、鎌倉方の総司令官（北条義時）の朝廷（具体的には後鳥羽院か）への敵意を指すのと同様、又、「二三」の「亡き人のため後ろめたく」が、別の男性と再婚する叔母の亡き夫への裏切りと言う意識を指すのと同様、「山のため、後めたう」は、宮の小倉山への裏切りを指す。但し、それは「立ち別る」ことをしてしまった場合である。今度の和歌では、「立ち別るべきことこそせね」と詠んでいるから、中納言は「おつしやる通り、せめて今日明日は、立ち去らないほうがいいです。」と言ったのである。

○いづくとか分きて定めむ…… 色香に魅かれて、あちこちに移ってしまう、世の中の人の心は、どこでも同じでしょう。

#### 〔四〕 中納言、八重律の姫君との初会

四条の程おはすに、いといたう荒れたれど、疎ましき程にはあらぬに、琴の音絶え絶え聞こゆ。何ばかり深き手遣ひにはあらねど、情け加はる爪音は珍しう艶なる心地し給ひて、あきのぶを御供にて、築地の崩れのあるより入りに見給へば、蓬所得て、三つの道も分き難き程なり、南に向きたる東の方に、灯のかげかすかに見えて、人のけはひす。やをら寄り給ふに、きしきしと鳴る簀子の音もうるさけれど、聞

きつくる人しも無きぞ心安かりける。されど、知りけるやうに、琴は弾きさしつ。からうじて、格子の隙より垣間見給へば、簾高く巻きて、浮き雲も無くて、静かに行く月のをかしきを、端近くて見る人の顔、言ひ知らずらうたげに、肩の程にかかれる髪の小ちたうひかへられける末も桂の裾に限りも見えずたまりてをかしきに、紫苑色の御衣に撫子などの馴れたるをなつかしう着なして、固紋・浮紋などの紅よりもなまめかしう見ゆるは人柄なめりと見給ふに、奥の方に「二人がけはひして、」<sup>ひたりふたり</sup>「なほ今一かへり」とそそのかし聞こゆれど、いらへもせず、月にながめ入りて、(八重葎の姫君)「見し夜の秋に」と言ひ消つは、つらき人の名残などを思ふにや。(中納言)「かかる道はいとはるかに、あはれを知るべきものとも思ひたらぬ我しも、かばかりにてたち返るべき心地もせねば、まして世の常ならむ人のあはれをまかけざらむは、などかなからむ。今の程にも忍び来る人あらば、見つけられむをこがましう」と思ひ続けられ給へど、「よしや、行きとまるこそ宿ならめ。住み果つべき世の中かは」とここにてさへいとはしき方も催され給ふ。(中納言)「御車、暁にもせよ」とて、あきのぶをば返し給ひて、なほ御覧ずれば、奥の方より人詣でて、(女房)「今は入らせ給ひね。夜はいたう更け侍り。忌むなるものに、さのみめで給ふと、あなたに聞こえ給ふ」など言へば、やをらすべり入る。君は(中納言)「いかがはせむ。なほ思ひ立つ方の叶はで心にもあらぬ世にながらふ程の慰めには、この人をやたのみてまし、ことごとしきものにもあらねば、一夜二夜にて見ざらむも、みづから一人のいとほしさこそあらめ、ここかしこの人聞きを憚るべき際にもあらず」など思ひ成りて、ひしひしとおろすに紛れて、母屋の屏風のはざまに忍び入り給ひて、うち静まる程に、衣を押しやりて寄り給へるに、まだよくもまどろまれねば、さどく驚きて、思はずなる御けはひをいみじと見るままにあさましようあきれて、いとほしき様なり。かねて心をはしたらむにてだに、まだ世慣れぬ程は思ひまどひぬべし。ましてわりなうわなきるたる、ことわりなり。(中納言)「たゆたふ心の程はそここそ知り給はめ。『その夜ながらの影は見ざりき』とこそ、いらへまほしかりけれ。げに容貌・匂ひこそその夜の人には劣り侍らむ、心ざしなどは、いかで負くべき。深きためしに、今、行く末の人にも言はせむ。ゆめ、むくつけきものに思ひ給ふな」と、いとなつかしうやはらかに語らひ給ふに、のどむとはなけれど、狐、木魂の変化にやとたちまちに消えまどひし恐ろしさは、少し静まりぬれど、何心もなう打ち解けたらむ程を見え奉りけむ恥づかしさも、死ぬばかりわりなくて、汗もよよと流れぬ。夜を長月と言ふにやあらむと言ひし頃なれど、更けにしかばや、程なく明け方近うなりぬ。

語釈

○琴の音絶え絶え聞こゆ。

管絃楽器の音が「絶え絶え」聞こえてくる、という情趣が特に好まれる。「はるけき野辺を分け入りたまふよりいともあはれなり。秋の花みなおとろへつつ、浅茅が原もかれがれる虫の音に、松風すこく吹きあはせて、そのことも聞き分かれぬほどに、物の音ども絶え絶え聞こえたる、いと艶なり」(「賢木」)(二)。「近くなるほどに、その琴とも聞きわかれぬ物の音ども、いとすげに聞こゆ。……筆の琴、あはれになまめいたる声して、絶え絶え聞こゆ」(「橋姫」)(九)

○入りに見給へば、……

「見給へば」は「灯のかげかすかに見えて、……」に続くと判断した。従つて、その間にある「蓬所得て、三つの道も分け難き程なり」には、読点を打つことにする。

○蓬所得て、三つの道も分け難き程なり、

井戸、門、厠に行く三つの道。「いづれか、このさびしき宿にもかならず分けたる跡ある三つの径とたどる」(「蓬生」)(七)《今井氏》。

○簾高く巻きて、浮き雲も無くて、静かに行く月のをかしきを、見る人の見る人の見る人の端近くて顔、

『源氏物語』の場合、簾を上の方まで上げた状態では、「月」を見ることが多い。「月をかしきほどに霧り渡れるをながめて、簾を短く巻き上げて人々ゐたり」(「橋姫」)(一〇)。

○あはれを知るべきものと思ひたらぬ我しも、かばかりにてたち返るべき心地もせねば、まして世の常ならむ人のあはれをもかけざらむは、などかなからむ。今井氏は、「恋の道には全く無縁で、情愛を感じることができようとも思っていないこの自分が、ただこれぐらいのこと(かいまみしただけ)では帰る気もしないのだから。まして世間普通の人で、こういう女性に心を寄せないものはあるまい」と訳している(傍線引用者)。原文の「世の常ならむ人の」が実線部、「あはれをかけざらむ」は二重線部、「などかなからむ」が点線部に対応している。この場合、「などかなからむ」は、どうしていいのだろうか、いやいるだろう、というのが直訳であつて、

点線部付けた「あるまい」は誤訳ということになってしまう。そこで、本作品の他の「あはれ」の用例とほだいぶ意味が違つてしまつが、「あはれをか(く)」は男として女に情欲を持つ、ではなく、「なげのあはれ」(133頁7行目)のように、人間としての思いやり、と解したい。相手の気持ちなど考慮せず、強引に体を奪つてしまう男がどうしていいのだろうか、いやいるだろう、の意。



なお、この箇所は原本八丁表7～9行目で、翻字の段階での誤りは無い。

○行きとまるこそ宿ならぬ 「世の中はいづれかさしてわがならむ行きとまるをぞ宿とさだむる」(『古今和歌集』・卷十八(雑歌下)・

九八七)《今井氏》。

○(中納言)「……。『その夜ながらの影は見ざりき』とこそ、いらへまほしかりけれ。げに容貌・匂ひこそその夜の人には劣り侍らむ、心ざしなどは、いかで負くるべき。…… 『その夜ながらの影は見ざりき』は出典不明。『その夜の人』も既述の部分に登場していないので不審である(今井氏が四六～四七頁で作品の欠陥のようなことを論じている際にも、この部分が取り上げられている)。

しかし、原本九丁表8行目～九丁裏1行目を検すると、翻字の段階での誤りは無い。ひとまず、この本文に基づいて解釈すると、中納言は、八重葎の姫君が昔の恋人のことを思い出していると勝手に判断し、その男性に比べて容貌の点では劣っているが、あなたへの愛なら負けない、と訴えているのである。

○よよと流れぬ。 今井氏は、「専ら声立てて「泣く」の修飾語に用いる「よよと」を「しとどに」の意に転用しているが、誤りというべきであろう」と注している。しかし、原本九丁裏7行目を検すると、翻字の段階での誤りは無い。ひとまず、この本文に基づいて解釈すると、「涙がよよと流れたし、汗も流れた」と解釈すべきであろう。「二九」で民部の大輔の迫られた際の「汗も涙も流れ出づ」(古典文庫本一二七頁)のように、あせりのための汗と涙とが同時にすることは自然である。加えて、本作品では、涙が流れる際、「涙」やそれに類する名詞が省略される場合もある。例えば、「二六」の「まづほろほるとこぼし給ふ」(古典文庫本一五一頁)などは、誰が読んでも、「まづほろほると、涙、こぼし給ふ」であろう。

○鳴き乱る虫の声々ぞ、玉の台うてなよりもこよなくまさりけり。 「なにせんにたまのうてなも八重むぐらいづらんかにふたりこそねめ」(『古今和歌六帖』・卷六・むぐら・三八七四。引用は、『新編国歌大観』に拠る)。「二」段落の「玉の台も八重葎とは良くも言ひける古事かな」の項参照。

〔五 きぬぎぬの朝〕

あきのぶ出で来てしはぶけば、(侍従)「思ひがけぬ事にもあるかな」とて、格子放ちて、侍従と言ふぞ出で行く。(あきのぶ)「かく参り

にたりと聞こえ給へ。いつ慣らはせ給へる御旅寝のいぎたなさならむ」と言ふ。(侍従)「誰にか聞こえさせむ。かかる御消息聞こえさすべき人もおはしませず。門違へにや」と言へば、うち笑ひて、(あきのぶ)「そこに導き給はぬには、かくしも打ち解け給ふべき御有様かは。あやしき御物争ひかな」と聞こゆるに、あやしう成りて、たち返り参り来るを聞きつけ給ひて、(中納言)「あきのぶはものしつや。夜はまだ深からむものを」とて起き出で給ひて、御直衣など引き繕ひて、昨夜入り給ひし方の格子、御手づから引き開けて、もろともに誘ひ出で給ふにぞ驚かれける。年頃の前渡りによく見奉りてをかしき御有様を見るたびに、(侍従)「いかなる人、かかる人に思はれ奉らるむ。さらむは、いみじき幸人」と思ひ渡りしに、(侍従)「さは、我がおもとは高き宿世のおはしけるよ」と、いと嬉しう思ひ居たり。いつの程に入らせ給ひつらむと、こればかりぞあやしかりける。明け方の月隈なく射し入るに、女、いとどまばゆくて、うち背き居る傍ら目、髪ざしのかかりはしも、やんごとなき人にも劣るまじくあてにらうたく見ゆ。修理などもせで、久しう成りぬれば、いたう荒れて、たたいとしげき草の上に隙間も無く置き渡したる露のみ、つらぬきとめし玉かと思えて、なかなか花もみぢよりもあはれに見ゆ。

暮るる間をたのめもなほ朝露の

置き別るるはわびしかりけり

鳴き乱るる虫の声々ぞ、玉の台よりもこよなくまさりけり。女、

寂しと思ほえぬかなよと共に

置き添ふ袖の露にならひて

とつつましげに言ふ様もなつかしうなまめきて、近くて見給ふはいとどらうたし。

殿におはしましても、寝られ給はず、(中納言)「をかしかりける人様かな。何ばかりの人にかあらむ。年頃の行き帰りに、目慣れたりし家居なれど、かくをかしくらうたきもののものすべきと思ひし。一夜の旅寝もむつかしかりぬべき軒の近さは疎ましう、繁き葎は扱はしう、さすがに又あはれにこそ見入れしか。さばかり思ひの草も生ふるものかな。さばかりすき事好む者どもの、今まで知らざりけむよ。我にてさへ長きはだしとおぼゆるぞ、腹汚き心にはありける。馴れゆくままに茂からむ恋草は、背く山路にはつきなかるべし。又、世の中を逃るる宿世なくて、例の人にてあらむにつけても、この方にうつし心なく心焦られしかかづらひありく、人の上さへもどかしう見苦しきわ

ざなり。今より絶え絶えに慣らはさば、かれも目慣れて、待たる宵もなからまし」とのどかに思しやすらふは、なほこよなき御まめ心なれど、世の中にはあだに言ふを身づからも聞き給ひては、(中納言)「いかなれば」とほほ笑まれ給ふべし。

語釈

○暮るる間をたのめてもなほ…… 「置き」に「起き」が掛けられている。全体の歌意は、「暮れるまで消えずに残っているとあてにする

ことができるとしてもなお、朝露がこちらの草とあちらの草とに分かれて置かれるのはつらいことだなあ(夕方になると会えると分かっている)であらう、朝起きた直後に別れなければならぬのはつらいなあ」。

○寂しと思ほえぬかな…… 荒廃した自宅の露がしとどに降りている様を表に出し、涙に暮れる自らの毎日を、慎ましかに、ほのめ

かした。全体の歌意は、「あたしはつらいとも思えませんが。生まれてこの方、露がしとどに降りていて荒れ果てたこの家でうごけてきたのだから(ずっと泣いてばかりいて袖に露がたまるのに慣れつこになってしまったのだから)」。

○寝られ給はず、「を」かしかりける人様かな。何ばかりの人にかあらむ 光源氏が朧月夜と初めて契りを結んで、帰宅した際の叙述と似る。

「入りたまひて臥したまへれど、寝入られず。を」かしかりつる人のさまかな、……など、よろづに思ふも心のとまるなるべし」(「花宴」(二))。光源氏も、宴の後、遅い時間に朧月夜と契りを結んだ。

○今より絶え絶えに慣らはさば、かれも目慣れて、待たる宵もなからまし 底本では、一二丁表一行目の半ば以降で、「今よりたえくにならハさは……」。今井氏はこれを「今よりたえくにならば、さは、……」としたが、採れない。誰かが、別の誰かを初めから(＝

夫婦関係なら結婚当初から、親子関係なら、その子が生まれてから)ある状態に慣れさせる、という意味の「慣らはす」という動詞の未然形に「ば」が付いた仮定節だと解釈したい。『鎌倉時代物語集成』でも「今より、たえくにならハさは、かれもめなれて……」のような句読である(三六一頁12～13行目)。

ある状態に慣れさせる、の意の動詞及びそのような動詞を名詞化したものの例を挙げると以下の通りである。

【用例その一】(源氏)「そよ、誰がならはしにかあらむ。思はずにぞ見えたまふや。人の心より外なる思ひやりごととしてももの怨じなどしたまふよ。(「落標」(七))」(光源氏が紫上を「慣らはす」)

【用例その二】同じき御親おやと聞こえし中にも、片時の間まも立ち離れたてまつりたまはでなはしたてまつりたまひて、齋宮さいくうにも親添おきぞへひて下りたまふことは例なきは例なきことなるを、あながちに誘いざなひきこえたまひし御心に、「濡標」(一四)「六条御息所が齋宮を「慣らす」」

【用例その三】近き年ごろとなりては、御仲も隔りがちにてなはしたまへれど、やむごとく立ち並ぶ方なくてはならひたまへれば、今は限りと見たまふに、さぶらふ人々もいみじう悲しと思ふ(「真木柱」(一〇))「鬚黒が鬚黒北の方を「慣らす」」

【用例その四】「……見ならはずなりにけることなれば、いとむ苦しき。かねてよりなはしたまはで」とかこちたまふも憎くもあらず。(「夕霧」(九))「夕霧が雲居雁を「慣らす」」

【用例その五】にはかにいかに思ひたまはん(「突然、夕霧六の君のもとに泊まる夜ばかり増えたら、中の君がどのように思うだろうかと」と心苦しき紛らはしに、このころは、時々御宿直とて参りなどしたまひつつ、かねてよりなはしきこえたまふをも、(中の君は)ただつらき方にのみぞ思ひおかれたまふ(「宿木」(二六))「匂宮が中の君を「慣らす」」

## 〔六〕八重律の姫君と叔母

中務の宮へ参り給ふ歸さのついでには、必ずとどまり給へり。この宿あそびの主は、故肥後の守なりける者の妻になんありける。女君は右大臣殿の御子にて、この北の方の姉なりける人の腹なり。二つばかりに成り給へる程に、母君ははかなく成り給ひてしかば、叔母君あはれに心苦しきことに思ひて、こまかにはぐくみ生おふし立て給ふ。(叔母)「いはけなき程はいかにも後ろめたければ、狭はさき袖に包みても、身を放たず見奉りてむ。大人しく成り給はば、あやしき身に引き添へては、人々しき世をもえ見給ふまじければ、いかなるたよりを求めても、殿の辺りにほめかしなむ。あはれと思したりしかば、ことのほかには思ひ給はじ。かつは、心の闇にまどはぬ親はあるまじげなれば、必ず数まへられ給はむ」と思ひつつ、明かし暮らすに、十二、三に成り給ふままに、めでたくをかしき御様なれば、いとどらうたく嬉しくて、(叔母)「この春の程にも聞こえむ」など、守とも言ひ合はせて、うちうちにその心設けどもし給ふに、守にはかに心地煩ひて失せにしかば、はかなく悲しきことを思ひ嘆きつつ、忍くぶ草摘むべき忘れ形見もなければ、領しる所などもよそのものに成りて心細かりしかば、(叔母)「この君をさへ放ちては、うらめしき世の中を、片時経べき心地もせず。かつは、この人を思はむ人をよすがにてながらへむ限りの世にはあらむ。容貌かたち

のめでたくおはすれば、不意に引き出で給ふ幸ひもなかなくてはあらむ」と念じ過ぐして、こちらの年月も重なりけるに、かく思はずに、うつくしき御宿世の出でまうで来しかば、いともの嬉しう、嘆き渡りける年頃のしるし見えて、いと心行きぬ。

語釈

○故肥後の守なりける者の妻になんありける　女主人公の母親代わりである叔母君が肥後守の妻だったと言うことであるが、今井氏の二一頁の系図では、この叔母君は、「故飛騨守北方」と記されている。誤植であろう。

○いかなるたよりを求めても、殿の辺りにほのめかしなむ。　「たよりを求（む）」の主語は自分自身だから、「殿の辺りにほのめか（す）」の主語もそうだと考えるのが自然である。だとすれば、「（一）」の「又も生まれ来ざらん」と同様、終助詞「ばや」のつもりで終助詞「なん」を使っているのか。そうだとすると、「ほのめかし」が連用形としか考えられないことが気になる。後考を俟つ。

○この君をさへ……などかなくてはあらむ　八重葎の姫君の存在を実父に知らせない理由を述べた、叔母の心内文。「この君をさへ放ちては、うらめしき世の中を、片時経べき心地せず」は、精神的に彼女がいなくては寂しい、ということであり、直前の地の文で言う「はかなく悲しきことを思ひ嘆きつつ、忍ぶ草摘むべき忘れ形見もなければ」と連動している。「この人を思はむ人をよすがにてながらへむ限りの世にはあらむ。容貌のめでたくおはすれば、不意に引き出で給ふ幸ひもなかなくてはあらむ」は、経済的に彼女がいなくては他に収入源の当てが無い、彼女の夫に成る人の経済的な援助に自分もあずかろうということであり、直前の地の文で言うと、「領る所などもよそのものに成りて心細かりしかば」と連動している。いずれにしても、自分本位の理由であり、守の生前の、「大人しく成り給はば、あやしき身に引き添へては、人々しき世をもえ見給ふまじければ、いかなるたよりを求めても、殿の辺りにほのめかしなむ」という、彼女本位の思いと明らかに矛盾する。

○念じ過ぐして　我慢しながら過ぐす。「かの御住まひには、久しくなるままに、え念じ過ぐすまじうおぼえたまへど、」（「須磨」（二八））。

「人の言ひ伝ふべきころほひをだに思ひのどめてこそはと念じ過ぐしたまひつつ、うき世をもえ背きやりたまはず。」（「幻」（四））

〔七〕初冬、中納言、八重葎の宿を訪問〕

例の、宮よりの帰さに、忍び紛れて入り給ふ。

冬立つまに、日に幾たびか晴れ曇り、時雨るる木枯らしに、うち散りたる櫓の葉は、遣り水も見えず埋みて、庭の梅と言はまほしく、山里の心地してをかしきを、そよめき渡り入り給ふに、今もさと吹き出づる風にはらはらと散りて、御冠、直衣の袖にとまるもみぢのをかしきを、(中納言)「かれ、見給へ。二月の雪こそ衣には落つなれ。様変へたるわざなりや」と払ひ給ふ。紫の濃き直衣に映え給へる手付き、顔の匂ひの愛敬は、女もをかしと見給ふらむかし。例のこまかにうち語らひ、長き世をさへかけてたのめ給ふこと多かるべし。(中納言)「いかで、名のりし給へ。かばかりに成りぬれば、いかなりともおろかに思ふべき中の契りかは」とゆかしがり給ふに、忍び過ぐすきにはあらねど、言ひ出でむことのつつましう恥づかしければ、(姫君)「木の丸殿に侍らばこそ」と言ふもはかなだちてをかし。

## (中納言)

「おぼつかぬ誰が植ゑそめて紫の

心を砕くつまと成りけむ

なほ、聞こえ給へ。かう隔て給ふは、行く末長かるまじき心と疑ひ給ふや。君によりてを遠き恋路の苦しきをも習ひたれば、ましていつ知るべきあだし心ぞ」と宣へど、

## (八重葎の姫君)

冬枯れの汀に残る紫は

あるにもあらぬ根ざしなりけり

とほのかに言ふ。(中納言)「あやし。この紫こそ、武蔵野のにも劣るまじうなつかしけれ」と戯れ給ふもいとをかし。暁露にそぼちつつ、ありき給ふも苦しければ、「朝夕ながむるところへ率て行かまし」と、途絶え難く思し成るは、はじめの御心には違ひにたるあやにくさなりや。されど、宣ひ置きし御辺りをさへいとほしく聞き過ぐすに心にまかせたる私のもの扱ひをして、ねぢけたることに、方々に聞かれ奉らむものはしたなかるべし。上ばかりこそ、愛しきものにせさせ給ふあまりにかかる事もいとほしく、けしからずとも聞かせ給ふまじけれ、かの大臣の辺りに言ひ騒がむ言の葉さへ思ひ続けられ給へば恥づかしくて、あるまじく思す。

## 語釈

○うち散りたる櫓の葉は、遣り水も見えず埋みて 以下、男女両主人公の気持ちが一番高まった逢瀬であるが、その背景が初冬の自然美である点には注目したい。

「おりふしの移り変るこそ、物ごとにあはれなれ」という総括で始まる、『徒然草』第十九段は、「春よりも秋のほうが「もののあはれ」が勝る」という伝統的な自然観を否定せず、しかし、秋にも劣らない自然美が「冬枯れのけしき」だと喝破している。紫式部の自然観で独創的だったのは雪景色を好む点であり、『源氏物語』でも当時の実際の京都の自然状況以上に雪の描写や雪を背景にした人物描写が多いのだが、同じ冬好きでも兼好はそれとも違い（新大系『徒然草』九七頁注二六にも「冬の代表的景物、雪に言及しない」と記されている）、汀の草に紅葉の散りとどまりて、霜いと白うをける朝、遣水より煙の立つ「光景を賛美している（傍線は引用者に拠る）」。『八重葎』のこの部分の自然は、第十九段の傍線部に似る。

○二月の雪こそ衣には落つなれ。様変へたるわざや 二月の雪こそ衣には落つなれ」は、今井氏も指摘する通り、『和漢朗詠集』の「松根に倚つて腰を摩れば 千年の翠手に満てり 梅花を折つて頭の挿めば 二月の雪衣に落つ」（春・子日・三〇）を引用したものである。『和漢朗詠集』の二月の梅花とは違い、初冬の櫓の葉を言っているのであるが、このように出典をはなはだしく変奏した場合の嘲笑（若しくは、自嘲）が「様変へたる」であって、「三」の「左衛門の君」「渚清くは」と御気色賜り給ふ。さるは、様変へたる岸の辺りなりけり」が類例である。

○長き世をさへかけてたのめ給ふこと多かるべし 今井氏は、「ながきよをかけて」と本文掲出し、「長い先々の世までもお誓いになることが多いだらう。この辺、夕顔巻の模倣著し。」と注する。例えば、「この世のみならぬ契りなどまで（光源氏は）頼みたまふに（夕顔に、たのみに思わせなさる）」（夕顔「二〇」）、「弥勒の世をかねたまふ。行く先の御頼めいどこちたし」（夕顔「二〇」）などが、この時の中納言の八重葎の姫君への言葉と一致しているよう。

○木の丸殿に侍らばこそ 世を忍んで朝倉の丸木の御所で過ごす天智天皇が、来訪者には必ず名乗らせたという伝承があり、それを本にして、木の丸殿を詠む場合は、「名のる」という言葉も詠み込まれる（以上、『歌ことば歌枕大辞典』を参照した。「木の丸殿」執筆は、

村尾誠一氏。八重葎の姫君は、ここが天智天皇のいらつしやる木の丸殿だったら、名乗りますが、そうではないので、名乗らなくてもいいでしょう、と「いかで、名のりし給へ。……」という言葉に答えたのである。

○おぼつかない誰が植ゑそめて…… 「紫の心を砕く」は、中納言が着ていたのが、「紫の濃き直衣」であつたことと関係あろう。例えば、『伊勢物語』第一段、

むかし、男、うひかうぶりして、平城の京、春日の里にしろよしして、狩に往にけり。その里に、いとなまめいたる女はらから住みけり。この男、かいまみてけり。おもほえず、古里にいとほしたなくてはありければ、心地まどひにけり。男の着たりける狩衣の裾を切りて、歌を書きてやる。その男、しのぶずりの狩衣をなむ着たりける。

春日野の若紫のすり衣

しのぶのみだれかぎり知られず

となむ、おいづきていひやりける。

ついでおもしろきこともや思ひけむ、

みちのくのしのぶもみずり誰ゆゑに

みだれそめにし我ならなくに

といふ歌の心ばへなり。むかし人は、かくいちはやきみやびをなむしける。(引用は、集成本に拠つた)

では、昔男は、自分の着ているしのぶずりの着物の模様のように貴女のせいで乱れている、と愛を訴えた。中納言も、自分に着ている直衣に紫の染料が深く沁み込んでいるのと同じくらい貴女が私の心に深く沁み込んでいる、と愛を訴えたのである。

全体の歌意は、「気になるなあ。私の心をこんなにも動揺させるきつかけとなつた紫草(＝貴女)は、誰が植ゑたのだろう(＝どなたのお子さんなのだろう)」。

○君によりてを遠き恋路の苦しさを習ひたれば 「君により思ひならひぬ世の中の人はこれをや恋といふらむ」(集成『伊勢物語』第

三十八段)《妹尾氏『八重葎』引歌表現覚書》掲出誌等は凡例参照》



○冬枯れの汀に残る……

八重葎の姫君の答歌。中納言の贈歌で、姫君は「紫」に喩えられている、若しくは、喩えられているように取れるので、目の前の遣り水に落ちてゐるのは槿の葉であるにもかかわらず、姫君も「紫」と自称し、零落しつつある境遇を踏まえて「冬枯れの汀に残る」と詠んだ。そして、いやしい出自であることを「あるにもあらぬ」で暗示した。

全体の歌意は、「冬枯れの汀に残っている紫草（のような私）は、あるのかないのかわからないようなはかない根ざしなのです（＝名も無い家で生まれました）」

○武蔵野のにも劣るまじうなつかしけれ

今井氏は、出典として、「紫のひともとゆゑに武蔵野の草はみながらあはれとぞ見る」（『古今和歌集』・卷十七（雑歌上）・八六七）を指摘する。「あはれと」見るのが、「なつかし」と思うことと類似するので、武蔵野の紫草は親しみ易いものだ、しかし、それ以上に貴女には親しみを感ずる、ということを書いたかったのである。

○曉露にそばちつつ、ありき給ふ

この「曉露にそばちつつ」は『徒然草』第三段の「露霜にしほれて」を想起させる。いったい、同第三段から第四段までに示されているような理想の男性像は、『八重葎』の中納言と似通ったところがある。

### （第二段）

よろづにいみじくとも、色好みならざらむ男は、いとさうどしく、玉の盃の底なき心ちぞすべき。

露霜にしほれて、所定めず惑ひ歩き、親の諫め、世の譏りを包むに心の暇なく、あふさきるさに思乱れ、さるはひとり寝がちに、まどろむ夜なきこそ、おかしけれ。

さりとて、ひたすらたはれたる方にはあらで、女にたやすからず思はれんこそ、あらまほしかるべきわざなれ。

### （第四段）

後の世のこと心に忘れず、仏の道うとからぬ、心にくし。

〔八〕 中納言、女房たちと談笑〕

上の御もとに渡り給へば、長炭櫃に炭起こして、集まりある人々の有様、いづれとなく目安く、裳、唐衣の色々安らかに着なしてさぶらひ慣れたるけはひを、（中納言）「をかし」と見給ひて、（中納言）「いで、何事を聞こゆるぞ。そと聞かせよ。無き程は、誰も誰も心地

よげにてをかしき歌物語もすると見ゆれど、まろだに來れば、いみじき虫などの這ひ來るやうに、(女房達)『それ、それ』と言ひてゐざり退き、音無しの里作り出づるや。さるは、つひに流れ出づる涙もあらむを」ととは笑みて聞こえ給ふに、若き人々は死に返りわびあへり。大人びたるは、なかなかもて出でて、(年配の女房)「さに侍り。森の下草さへ、駒だにすさまじと思ふ給ふれば、まして、若き人は川と流れずといふことなくや侍らむ。ただ、その水上は御前ぞ知らせ給ふべき」といらへ聞こゆるに、え耐へですべり隠るもあり。あるは、つきしろひ、うつ臥しなどすべし。(中納言)「あやしきわざかな。この聖をさ宣はむは、三瀬川のおしるべにやあらむ。仏の顔よりほかに、見るべきものもおぼえぬ痴れ痴れしさを」とて立ち給ふ。かの葎の宿のひじき藻は、忍び給へど、ほのぼの皆聞きてければ、(女房)「いで、それは仏にやおはす」と言へば、そばなる人、(女房)「如意輪觀世音にてこそいませ。さばかりの御身に、空言は、何、せさせ給はむ」などささめきて忍び笑ふ。

## 語釈

○いづれとなく目安く、藻、唐衣の色々安らかに着なしてさぶらひ慣れたるけはひを、「をかし」と見給ひて　薫が、明石中宮の部屋に入つたとき、「さぶらふ限りの女房の容貌、心ざま、いづれとなくわろびたるなく、めやすくとりどりにをかしき」と感じた(「総角」(一一五))が、同様の光景であろう。

○音無しの里作り出づるや　今井氏は、出典としては、『拾遺和歌集』七四九番「恋わびぬ音をだに泣かむ声立ていづこなるらん音無しの里」(恋二)を挙げながら(31頁第三項目。但し、今井氏は歌番号は記していない)も、「しかし次の「さるはつるにながれいづる」云々の続きかたからみて、あるいは、他に適当な典拠を求めるべきか。意味あきらかではない」としている(186頁の注一二)。私は、女房たちが突然話をやめることを、「音無の里」という歌枕にひきつけて表現しただけだと考える。『拾遺和歌集』では、その直後に「音無の川とぞつるに流ける言はで物思人の涙は」(恋二、七五〇)が配列されているが、七五〇番のほうは、「忍ぶ思いで流れた涙を、音無の川によそえる」ものである(新大系の白抜き三角印以下)ので、それに基づき、涙が「流れ出づる」と言ったのであろう。涙が流れ出すとは、恋をすれば楽しいときだけでなく悲しいときもあるということを前提に、「恋をする」ことを意味する物言いである。これを受けた、大人びた女房の詞の中の「川と流」る、も、やはり、恋をして、そのために涙も流すときがある、ということの意味するが、こ

こまではその恋がほかの男性との恋を想定した言い合いだったのに対し、「その水上は御前ぞ知らせ給ふべき」で、「若い女房たちの恋の相手も、又、若い女房たちを泣かせるのもあなたですよ」と、特定したのである。《以上、この項目は、妹尾氏『八重葎』引歌表現覚書』(掲出誌等は凡例参照)を参考にさせていただいた》

○若き人は死に返りわびあへり。大人びたるはなかなかもて出でて 蜻蛉巻の、いわゆる宮廷恋愛の場面で、薫が女房たちに語りかけた際も、「若い女房たちは、皆」いと答へにくくのみ思ふ中に、弁のおもととて馴れたる大人」が口を開いている。

○森の下草さへ、駒だにすさまじくと思ふ給ふれば 今井氏は、「大荒木の森の下草老いぬれば駒もすさめず刈る人もなし」(『古今和歌集』巻十七(雑歌上・八九一)を指摘する。これを踏まえ、私のような老女でも、男の人さえ声を掛けてくださるなら、その気になりますから、まして、……という気持ち。

○つきしろひ 「つきしろふ」は、本人にはなるべく聞こえないように、女房同士、噂話をしている、あるいは、口に出さずとも合図をしあっていると言う用例が目立つ。

【用例その二】桐壺には、人々多くさぶらひて、おどろきたるもあれば、かかるを(光源氏がこのような朝帰りをするのを)、「さもたゆみなき御忍び歩きかな」とつきしろひつつ、そら寝をぞしあへる。(『花宴』(二二))

【用例その二】唐の紙ども入れさせたまへる御厨子あけさせたまひて、なべてならぬを選び出でつつ、筆なども心ことにひきつくりひたまへる気色艶なるを、御前なる人々、誰ばかりならむ(光源氏の文通の相手は、どのくらい優れた女性か)とつきしろふ。(『賢木』(二五))

【用例その三】(光源氏が)せめてわれ賢にかこちなしたまへば、女房などはすこしつきしろふ。(『若菜下』(一九))

【用例その四】(夕霧の)御なよび姿、はた、いといたうたをたぎけるをや」とこれかれつきしろふ。(『柏木』(一二))

○この聖をさ宣はむは、三瀬川のあるべにやあらむ 今井氏は、「私のような成人をそのようにおっしゃるのは、三途川の道案内をさせようともいうのでしょうか。女が死ぬと、生前はじめて契を交した男に手をとられて、三途川を渡るといふ俗信があった。(略)」と注する。女房たちの中で、中納言と始めて契りを交わした者や、交わす可能性がある者がいるかどうか不明なので、やや唐突な発言である。後考を俟つ。

○葎の宿のひじき藻 「むかし、男ありけり。懸想<sup>けさう</sup>じける女のもとに、ひじき藻<sup>も</sup>といふものをやるとて、思ひあらば葎<sup>むくし</sup>の宿に寝もしなむひじきものには袖<sup>そで</sup>をしつつも(略)」「(集成『伊勢物語』第三段)《今井氏》。この出典に基づき、語り手は八重葎の姫君を「葎の宿のひじき藻」と呼んだ。

○いで、それは仏にやおはす 「いで」は、相手の言ったことを否定する働きを持つこともある。「夕霧」……(光源氏は)宮(Ⅱ女三宮)をば、かたがたにつけて、いとやむごとなく思ひきこえたまへるものを」と語りたまへば、(柏木)「いで、あなかま、たまへ。みな聞きてはべり。(女三宮には)いといとほしげなるをりをりあなるをや。……」「(若菜上)「(三九)。ここでも、「いで」に続く「それは仏にやおはす」が、限りなく否定文に近い疑問文である。

○如意輪観世音 女性が如意輪観世音に喩えられている例として(但し「如意輪観音」)、『書陵部本和歌知願集』に「かの業平、馬頭観音として、この事を案じ給しに、小町はおなじく菩薩如意輪観音として、ともに議し給て、かれはたはれをとなり、是はたはれめとなりて、おなじ世にいで給へりし人也」と言う一節がある(片桐洋一氏『伊勢物語の研究(資料篇)』(一九六九年)一一二頁上段)。

〔九 母、中納言に、右大臣の姫君との縁談を勧める〕

御前へ参り給へば、上は白き御衣<sup>ぎ</sup>に二藍の小桂奉りて、御几帳引き寄せ、をかしげなる御火桶に寄り居<sup>ゐ</sup>させ給ふ。見つけ給ひて、珍しからむ人のやうに急ぎ出で向かはせ給ひて、愛<sup>かな</sup>しういとほしき者に思したる御様もあはれにかたじけなし。(母君)「御帳に入らせ給ひね。隙間の風もわりなう吹き入り侍る」と聞こえ給へど、(母君)「さもおぼえずや」とてなほついゐさせ給へば、立ち寄り給ひて、几帳手づから引き寄せ、御火桶取りまかなひて奉り給ふに、涙さへこぼし給ひて、たのまじう嬉しと見給ふも、ことわりなりかし。君にも同じ様なる御火桶奉り、上臈<sup>ひとりふたり</sup>だつ二人、御前にさぶらひて、さるべき菓子<sup>くだもの</sup>など参りて、しめじめと御物語聞こえおはす。(母君)「かの遺言はいかが思ひ成り給ふ。上にも聞かせ給ひて、(帝)『ひがひがしきことかな。大臣の言ひ置かずとも、さやうの後見設けて、ただよはしからで公に仕うまつらむこそかしこからめ。まいて遺言にしたなることを聞かざるはいかなる心ならむ。亡き人のためも後ろめたき心なり』と宣せたりと昨日中宮よりわざと中納言の君して伝へ聞こえさせ給ひつる。年の内は程もなければ、年返りて如月ばかりに思ひ立ち給はば嬉しかるべきわざを」と宣へば、(中納言)「内裏<sup>うち</sup>にさへ聞こえさせ給はむぞ、からき心地し侍る。何かひがみたる心づかひはものし侍らむ。かの

母君ぞ、(右大臣北の方)『左大将か、さらずは内侍にて帝に奉らむなど思ひかしづきしに、思ひのほかなる宿世』とて心も行かずおとしめらるるとまねぶ人の侍れば、いと口惜しう思う給へらるる。殿の愛しう思ふあまりにさらでもありぬべきこともあながちに宣ひ置かせ給ひて、かたがたにあぢきなくむつかしき耳を聞かせ給ふこと」と申し給へば、(母君)「あやし。それはひがごとならむ。大臣も上も、『もの憂げに見え給ふ』とて、恨み宣ふとこそ、ここなる御達の知れる者の、かの辺りにあるなん、語りしと聞く。おほかたもさこそほのめかし給へ。大将殿は知らず、内裏には弘徽殿さぶらひ給ふに、同じ枝にて連なり御覽せさせむとは、二所ながらよも思ひ給はじ。ただかけ離れむと、切にはぶき給ふあまりの作りごとならむ」と宣ひ合はせたるも、いみじうをかしけれど、つれなく念じて、(中納言)「したたかに積もりけるかな」と雪に紛らはしてやみ給ひぬ。

語釈

○(母君)「御帳に入らせ給ひぬ。隙間の風もわりなう吹き入り侍る」と聞こえ給へど、(母君)「さもおぼえずや」とてなほつゐるさせ給へば、今井氏の本文掲出には、話者をポイントを落とした、(一)付きの活字で補っている箇所があるが、それに従うなら、「御帳に入らせ給ひぬ……」は、中納言の詞である。断言はしかねるが、私は中納言を氣遣つた母の詞と取り、彼女はその後、過保護にし過ぎるのもどうかと反省し、又、自分が寒いからと言って若い中納言も同じと考えるのは誤りだと氣付き、「さもはべらずや」(「や」は疑問で、あなたにとっては寒くないかしら)の意と付け加えた、と解釈したい。中納言は、母が寒く感じていることを察知し、この後、火桶の火を強く、温度を高くしたのである。

もし、今井氏の言う通り、初めが中納言の詞だとすれば、母が「さもおぼえずや」(この場合、「や」は感動・詠嘆を表し、「そんなに寒く感じませんわ」の意であろう。中納言は母にとって寒いだろうと言っているのだから、この言葉も母自身にとつて寒いかどうかを問題にしているはずであり、だとすれば、疑問文とは成りにくい)と答えたことになる、本人が寒くないといっているのに、その後中納言が火を強くし温度を上げると、今度は逆に暑すぎるということになりかねない。

尚、打消しの助動詞プラス「や」で終わる文で、疑問若しくは反語としか取れない(感動・詠嘆とは考えられない)ものは、

【用例その一】この女君などは、思ふことかなふまでの慰めなり。さるは、江口の君(遊女)などと同じことに侍らずや。(二二二)

【用例その二】 本より催<sup>もよほ</sup>さぬ道心なれば、仏の御心にも叶はで、この世もかの世もいたづらになさずや。(二二)

【用例その三】 (叔母) 「……知らぬ人々の見聞き思ふらむ程も(八重葎の姫君『恥づかし』とは思さずや」(一七)

【用例その四】 胡の国へ行きし女も侍らずや。その類<sup>たぐひ</sup>にも思し弱りて、(一九)

【用例その五】 ほととぎす恋ふると告げよ亡き人に 死出の田長と名には立たずや(二五)  
が挙げられる。

○かの母君ぞ、(右大臣北の方)『左大将か、さらずは内侍にて帝に奉らむなど思ひかしづきしに、思ひのほかなる宿世』とて心も行かずおとしめらるとまねぶ人の侍れば、いと口惜しう思う給へらるる。 母が帝の意思に基づいて縁談を勧めるのを断る中納言の言葉で、

先方が自分と言う男に「心も行か」ないで、自分を「おとしめ」ている、ということ。

母が、帝↓中宮↓中納言の君(という女房)↓自分、というように、伝達者を明示したのに対応して、中納言は、右大臣次女の花婿候補に自分が入っていないということを、右大臣の北の方↓まねぶ人↓自分というように、やはり、伝達のルートを挙げながら、説明したが、伝達者として固有名詞をあげることができなかったのでいささか説得力が弱い。何より右大臣次女の花婿候補の中に帝も入れたことで、尻尾をつかまれてしまう。やはり、無理に固有名詞を上げると、うそをついている場合にはうそがばれるものである。

(二〇 師走、母君、八重葎の姫君と中納言との関係を知る)

師走の程は、いとどかきくれ、雪霰がちに降り乱るるに、葎の宿は、絶えて住むべき心地もあるまじげなれど、うちうちのみめやかなる方さへ、あはれにありがたくとぶらひ聞こえ給ふに、慰むこと多かるべし。朔日<sup>ついで</sup>の装ひも思しやりて、女の装束<sup>さうぞく</sup>一領<sup>ひとへうり</sup>ものすべきよし、中将の君のもとへ宣ひたれば、うるはしき綾織物あまた取り出でて、上の御前にかうかうと聞こゆれば、(母君)「誰にものするにか。これをや、かれをや」と御覧じくらぶ。人々つきしろふに、心得させ給ひて、(母君)「あはれと思ふ人や持たる。もしさやうの料ならば、はえなきはものしと見るべきぞ。山吹、濃き綾の袷、桜の細長ぞ、あざやかにをかしうはあれ」とて参らせ給ふにも、(母君)「例の人の心ならましかば、こころうつくしくうたき児<sup>こども</sup>どもありて、かくつれづれなるに孫<sup>むすこ</sup>扱ひして慰めてましを。あさましう世づかぬありさまこそ、誰<sup>た</sup>がためにも苦しけれ」と宣はするついでに、中将の君、忍びてこの人知れぬ御もの扱ひを聞こえさすれば、ほほ笑み給ひて、(母君)「いつよりぞ。か

かるものありと見ゆるばかりのけしきも見えぬは、まろのみや、さは見るらむ。男といふものの、かれがやうなるやある。子ながらもありがたまめ人なれば、さぶらふ人々も、少しあはあはしく見ゆるなどは、恥づかしこそあれ」と宣ふ。(中将)「下にても、それと見とがめ奉るばかりの御けはひはつゆ見えさせ給はず。かの辺りわたりのことうるさがり給ふを、(女房)『いかなれば』などおのがじし語らひ嘆き侍りに、今はいとどうとく成らせ給はむ。(あきのぶ)『しかじかの御慰め所あり』と、あきのぶの朝臣の語り侍りし。(あきのぶ)『いみじう隠させ給ふ。ゆめ、気色見ゆな』とこそ、いましめられ侍りし。御前にもさ心得させ給ふべく」と申せば、うなづき給ひて、(母君)「まことに、かの大おとど臣の辺りわたりに聞き給はむはいとほしかるべきわざなり。身づから、それを思ひてぞ忍ぶらむ。我にて知り顔にものせむは、こかしこ、聞き苦しかるべし。人々もそのよしにもてなさなん、良かるべき。珍しき様に、などは聞かぬか。さやうの下草にだに」と宣ふものから、(母君)「知らず顔作らむと言ひしには、又こよなく変はりたり」とて笑ひ給ふ。

#### 語釈

○人々もそのよしにもてなさなん、良かるべき。 「もてなさ」の下したの推量の助動詞「ん」があるが、撥音無表記の慣例に従つた、と考える。「ん」は、ここでは、仮定の意味である。「(一二)の、大弔の詞の中の左大臣の詞、この殿をたのみ聞こえて、なにがしと思はむなん、行く道も嬉しかるべく」の「む」と同じ。

○珍しき様に、などは聞かぬか 思わず、口をついて出た言葉。母は、その女性と中納言との間に子供が出来たかどうかを一番知れたがつている。直前の、「例の人の心ならましかば、こころうつくしくらうたきち児どもありて、かくつれづれなるに孫むまこ抜ひして慰めてましを。あさましう世づかぬありさまこそ、誰がためにも苦しけれ」という詞と呼応している。「珍しき様に」が懷妊を指す点については、例えば、「やむごとなき方はことに思ひきこえたまへる人(「葵上」)の、めづらしきことさへ添ひたまへる御悩みなれば、(光源氏は)心苦しう思し嘆きて、御修法や何やなど、わが御方にて多く行はせたまふ」(「葵」(「一二」)などの用例がある。

#### (二) 新年、八重葎の宿での和歌の贈答

年も暮れぬ。立ち返る空は、昨日に変わるけぢめも見えねど、風の音もうちつけにゆるく聞き渡され、鳥の囀りも霞む心地してをかしきに、中納言殿、梅うめの御直衣なほし、青鈍あそにひの固紋の御指貫をたをたと着なし給ひて、まづこなたに渡り給ひて後、御車のちに奉りて、内裏うちに参り給ふ

御様の切になまめかしきぞ、今日の寿にもまさりてめでたく見えける。

公私もの騒がしき頃過ぐして、葎の宿へは訪れ給ふ。女君、ありし御心ざしの色々ををかしう着なし給ふ。たそがれのかたはら目、髪のかかり、言ひ知らずあてにらうたげなり。紐解き散らし、うち解け給ひて、(中納言)「かくてこそ心安かりけれ。玉の台も八重葎とは良くも言ひける古事かな」とて、腕を枕にて臥し給ふに、枕の程に箏の端少し見ゆれば、およびて、引き寄せ給ひて、(中納言)「このものよ。まろが仲立ちなめり。いと睦まじう思ふべきを、又いかならん人をかひき入れましと思ふぞ、後ろめたき」とほほ笑みて聞こえ給ふに、女、いみじう恥づかしと思ふ。手まさぐりにし給ふを、(女君)「同じくは」とゆかしげに見ゆれど、(中納言)「この辺りにも、我がごとくなる人もあるべし。忍ぶとすれど、おのづから、それかあらぬかと気色見る人あらむに、このものの音に、『さればよ』など、いちじくるくかかるやつれを知られむも苦し」と思せば、(中納言)「いな、ここにてはつつまし。心安き隈求めてぞ、天地を動かすばかりも弾き出でむ。ものの上手は、おぼろげにては、手触れぬものぞ」など、笑ひ給ひて、(中納言)「さまざまの音を調べ整ふるより、枕にしたるはこよなくをかしきぞ。君も寝給へ。いざもろともに」とて、うち臥し給ふにぞ、身の口惜しさは返す返す思ひ知られける。

明け行くに返り給ふとて、妻戸押し開けて、見だし給ふに、垣根の雪は春を知らぬ顔に氷り閉ぢめて白く見ゆるに、空はや霞み渡りて、やぶしがくれの鶯も、今ぞ目覚まして若やかに鳴く。

(中納言)

春霞立ち居にかかる心とは

朝の空を見ても知らなむ

静心もなしや」と宣ふ。

(姫君)

我がためといかで見ろべき押しなべて

春のものとて霞む霞を

(中納言)「思はずにも取りなし給ふかな。深き所を尋ね給はば、我が心にこそ入り給ふべけれ」とてなほ立ち返り、出でがてにやすらひ給



へりとか。

### 語釈

○年も暮れぬ。立ち返る空は、昨日に変わりはたれども見えねど、…… 「……かくて明け行く空のけしき、昨日に変わりは見えねど、

引き替へめづらしき心ちぞする。……」(新大系『徒然草』第十九段《今井氏》。

○ありし御心ざしの色々ををかしう着なし給ふ 中納言から贈られた、色々な色のお召し物を上手に着こなしたる。「九」参照。

○玉の台も八重葎とは良くも言ひける古事かな 「玉の台も八重葎」は、「なにせんにたまのうてなも八重むぐらいづらんなかにふたりこそねめ」(『古今和歌六帖』・巻六・むぐら・三八七四)。この和歌は、「うつほ物語」「忠こそ」でも、「千蔭」「玉の台も、といふは、そ

れぞかし」とのたまひて、北の方の御帳の内に御座所おまどころして、大殿籠りおほどのいもなどするに、……年経れど忘れぬ人の寝し床ぞ独り臥すにもうれし

かりける」(一六)と引き歌されているが、衣食住に恵まれた環境よりも、心から愛する女性の部屋(但し、千蔭の場合は、その女性は

故人と成っている)のほうがち着く、という男性の心理を表している。書名も、この詞に由来しているのだろう。塩田公子氏『八重葎』

題名考」(『岐阜女子大学紀要』第十九号。平成二年)参照。

○いかならん人をかひき入れまし 「引き入る」は、「弾き入る」と、「(男を)引き入る」の掛詞。

○枕にしたるはこよなくをかしきぞ 今井氏は、「琴を枕にすること典拠あるか、未詳」とするが、自分が八重葎の宿に居るということ

を世間に知られたくない中納言が、琴の演奏を回避するためにその場しのぎのでたらめに言ったのであり、恐らく、典拠など無いだろう。

○春霞立ち居にかかる…… 全体の歌意は、「春霞が立つて居るが、「立つ」と言えば、私は立つていても座つていても、貴方のことが氣

に懸かっている。そんな気持ちであることを、この霞の立つた朝の空を見てわかつて欲しい」。

今井氏は、この和歌の本歌として、「恋歌中に 式子内親王 しるらめやかづらき山にある雲のたちるにかかる我がこころとは」(『新

後撰和歌集』・巻十一(恋歌二)・七七九)を特定する。

○我がためといかで見るべき…… 私のことが氣に懸かっているせいだとしてわかるのかしら。春はいつだって、空全体に霞がかか

るものだから。

## 〔二一〕母、発病)

去年の大井のもみぢの宴を宮、常に宣はせ出でて、(中務宮)「又、さばかりのをかしさがな」と聞こえ給へば、(中納言)「かうのどかならず紛れ歩くも、その帰さからぞ」とまづ思ひ出でられ給ひて、(中納言)「衛門督なども忘れぬ様に申され侍る。花盛りの程に大原へ御供つかうまつりて、小塩の花御覽ぜさせむ。神代のこと、思し出でむにますことさぶらふまじ」と聞こえ給へば、(中務宮)「必ず。遅らかに給ふな」など宣ひ暮らすに、二月の十日頃より、母上、御胸を病み給ひて、苦しがり給ふ。

かりそめにもあらで、いと大事に見え給へば、なにがしかれがしと僧ども召し寄せて、御祈り始め給ひ、殿の内、騒ぎののしる程思ひやるべし。君はつと添ひ居給ひて、御湯など勤め給へど、つゆも御覽じ入れねば、いみじう思し嘆き、夜昼と扱ひ、いかさまにして救ひ奉らむとここの御願ども、思し渡らぬ限なげなり。中宮よりも、しばしば訪ひ聞こえ給ふ。ただ、この御方をまことの御親ともたのませ給へば、嘆き思したる様、いかでおろかならむ。中納言の君、宰相の君など付け置かせ給ひ、御身づからも降りさせ給はむことを宣す。中務の宮も、いみじう嘆かせ給ひて、心深く聞こえさせ給ふ。上、はた、まして悲しう思すままに、身づから渡り給ひて見奉り、扱はせ給ふ。さらぬ所々の御とぶらひ聞こえ入るも隙なげなり。かかる御心惑ひの折からなれば、あらぬ根ざしなどへも渡り給はず。御心地の様など聞こえ給ひて、御文ばかりぞ幾度となく書き尽くし給ふ。されど、当たりたる御宮仕へは欠かし給はねば、内裏ばかりへは参り給ふを、上も御覽じて、(帝)「さばかり心苦しきことを置きて、かく仕ふるはあるまじきことなり。よろづのことを捨てて静かに籠もり居て、よろしく見たてね」と、かたじけなく宣はすれば、かしこまり給ひて、上にも(中納言)「しかじかなん」と仰せごとのかしこさを語り申し給へば、ものもおぼえ給はぬ心地にもありがたく思し喜ぶ。

## 語釈

○花盛りの程に大原へ御供つかうまつりて、小塩の花御覽ぜさせむ。神代のこと、思し出でむにますことさぶらふまじ 今井氏が指摘しているように、『伊勢物語』第七十八段を典拠としている。

むかし、二條の後の、まだ東宮の御息所と申しける時、氏神にまうで給ひけるに、近衛府にさぶらひける翁 人々の禄たまはるついでに、御車よりたまはりて、よみてたてまつりける。

大原やをしほの山も今日こそは神代<sup>かみよ</sup>のことも思ひいづらめ

とて、心にもかなしと思ひけむ、いかに思ひけむ、知らずかし。(引用は集成本に拠る)

大原、現代では、大原野へ行つて、小塩山の桜の花をお目に掛けよう、と中務宮が中納言を誘つたのである。

○「必ず。遅らかし給ふな」 必ず(底本では「かならず」)の下に句点を打った。必ずそうして下さい。必ず小塩の花を見せて下さい、とたのみ、その後、置いてきぼりを食わせないでください、と付け加えたのである。

○この御方をまことの御親ともたのませ給へば、この表現は、中宮にとつて、発病した「母上」(中納言の実母)が継母である場合のほうに自然であり、21ページの今井氏の系図の正しさが推定される。

○中納言の君、宰相の君など付け置かせ給ひ、御身づからも降りさせ給はむことを宣す。今井氏は、「をりさせ」について「をろさせ」の誤りか。出家剃髪すること。その功德によつて生命を延ばすことができると思へられていた」とするが、底本は確かに「をりさせ」であり(二二丁裏7行目)、この本文のまま解釈するとすれば、主語は中宮であり、一時宮中を退出することである。実の親同然に慕っている中宮は、まずは中納言の君、宰相の君などを派遣したが、それだけでは飽き足らず、自分自身も看病したいと思つた、ということであらう。

○上、はた、まして 今井氏の本文掲出には、右傍にポイントを落とした、( ) 付きの活字で、簡単な注が加えられている箇所があるが、それに従うなら、「上」は帝のことである。しかし、「中務の宮も、いみじう嘆かせ給ひて、……」と言う文の直後であるので、中務宮の正妻のことと解したい。

○あらぬ根ざし 「七」の詠歌(「冬枯れの汀に残る紫は あるにもあらぬ根ざしなりけり」)に基づき、八重葎の姫君の家を指す。《今井氏》○かく仕ふるはあるまじきことなり 今井氏の翻刻は、本行は、「かつつかうるは有まじき事なり」で、「かつ」の「つ」の傍らに、「マ」と記されている(92頁九〜一〇行目)。

この写本では、普通、「つ」に読める字が「く」として使われることがよくあるので、私は「かく」と翻刻し、これをそのまま釈文とする。今井氏が注二三八を施した箇所においても同様の釈文を作りたい。